

2025年(令和7年)

第85号

(5月4日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 澤村悦玄
 編集委員長：渉外広報 植田恭司
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

諸国客衆商売繁昌祈年祭 ～地域発展・社業発展を願う～

昨年に続き、今年の諸国客衆商売繁昌祈年祭が4月20日、教会法座席で行なわれ多くの社業発展を願う会員が参集しました。読経供養の導師を東教会長が務め、前唱文の中で170社の社名を読み上げました。



その後、教会長はお言葉で「客衆」とは大事なお客様を意味し、お客さまがおられて我が社の発展があり、ひいてはあらゆる地域の発展があると、祈年祭の意義をかみしめました。続いて、今回の祈年祭を開催する

にあたり、有り難いことがあると述べ、1つ目は上賀茂神社の土解祭(どげさい)に招待を受けたこととし、その祭りが『本年の稲作を始め、あらゆる事業の隆昌を祈願する重要な祭典』であることから教会の祈年祭も同じ4月に開催出来たこと、2つ目はサンガがサンガを祈り合うことが出来たこと、3つ目はコロナ禍を経て社会が変容し、人の流れも変わり、社業も変わり、会社を生まれ変わらせなければならなかったのではないかとしながらも、庭野開祖の教えに照らし合わせれば、『苦しいことが修行なんだ』と腹を据えることの大切さを学んだこととしました。

また、『自分の巡り合っている仕事に誠心誠意打ち込んでいく人は一隅を照らす人だ。このような人が人を救い、世の中を立て直していくことが出来る人』という庭野開祖の言葉を紹介しながら、足元の菩薩行実践を促しました。

降誕会 ～小学新1年生の紹介ムービーで笑みがあふれた～

降誕会式典が4月8日、教会法座席で行なわれ多くの会員が参拝しました。本部大聖堂とのインターネット配信も併用しハイブリッドな式典となり、教会での司会は釈尊降誕にちなんでインド本場のサリーを身にまとい、華を咲かせました。教会独自式典の初めに、少年部制作の小学新1年生の紹介ムービーが流れると会場からは笑みがあふれ温かい拍手が送られました。

その後、東教会長はお言葉の中で、自身が本部でお役を頂いていた頃に小学校の前に花御堂を出したことがあり、お昼休みに子供たちや学校職員が大勢合掌して灌仏してくれたと述懐。子供たちの純真さ、尊いものを拝む姿勢に逆にこちらが心洗われたと当時の様子を振り返りました。続いて「大人(たいじん)は赤子(せきし)の心を失わず」という孟子の句を引用。

高德の人は幼時の純真な心をいつまでも失わず、それをひろめて大きな徳をそなえるようになったと解説しながら、『何を信じ、何を仰いでいくのか』と佼成4月号の庭野会長のご法話にもふれ、もう一度、純真な心を大事にしていきましょうと述べました。

また、京都の各地の寺院に保存されている涅槃図を紹介。涅槃図から八正道、無常の教えを学ぶことが出来るとし、信仰は奇跡を願いがちではあるが、釈尊が残されたものは教えであって、それをいかに実践していくか。つまり、信仰とは教えを学び実践することであり、自分自身の人生観を変え、人さまをお救いしていくという菩薩の誓願をもって私たちは生まれてきたと述べ、自分たちの足元を再確認して精進しましょうと締めくくりました。

京都教会ビデオレター5月号 配信中 ～東教会長発～

ビデオレター5月号が京都教会のホームページで公開されています。パスワードは各支部長にご確認下さい。
<https://rkk-kyoto.jp/archive1/20250501>



左記のQRコードをスマートフォンで読んで、ご覧頂くことも出来ます。地区単位、各家庭においても視聴し、1ヶ月の修行目標とさせて頂きましょう。

令和7年、私たちは「仏さまと出会い サンガと語り合っ て 心田を耕そう」を実践して参ります。京都教会のホームページもご覧下さい。<https://rkk-kyoto.jp/> (右のQRコードからご覧頂けます)



祇園祭ボランティア勉強会・説明会 ～京都府モラロジー協議会にて～

京都・祇園祭ボランティア21は4月12日、上京区の京都府モラロジー協議会において今年度のボランティア勉強会・説明会を開催し、加盟団体の代表者が集合、京都教会青年部からも1名が参加しました。当ボランティアの会長あいさつの後、公益財団法人 祇園祭山鉾連合会理事長の木村幾次郎氏から約1時間、祇園祭についての講演があり、参加者は熱心に耳を傾けました。



平安京の頃から「町」「坊」があり、現在もその頃の名称がそのまま残っていることや、道を挟んで上下を

一つの「町」として形成され、町ごとに「木戸」が設けられ夜になれば閉められた風習があったことから、今でも山鉾の曳き初めの際、隣町に挨拶に行くのは、この頃の木戸を越えることによる名残りではないかという独自の視点から解説されました。

また応仁の乱(1467～1477年)以前と以後で祇園祭の様相がずいぶん変わったとし、応仁の乱以前は前祭(さきまつり)が32基、後祭(あとまつり)は28基と現在よりもはるかに多い山鉾で巡行しており、中には名称も変わった山鉾もあるとしました。

巡行を支える経済基盤についてもふれ、各町内がお金を出して運営し、永年、各町内独立採算制だったため隣の町内のことは分からなかったことで明治に入って困窮してしまう町内が増えたことから、明治以降、各町の経済状況を八坂神社に報告するようになったと、その経緯を述べました。

また祭りの支援は住人の寄付によるものではあるが、長刀鉾町の住人は0人で、理事長自身をはじめ多くの方々のボランティアによって支えられていると当会にも感謝の意を述べました。

鉾の方向を調整する「車方(くるまかた)」についても、昔は大八車(だいはちぐるま)を作っている車大工という職人がおられたが、今はおられないため、車方の練習の場がなく、ほとんどがぶっつけ本番で継承する難しさがあり、そのため辻回しの時間が長くなってしまするなど、昨年の車輪の破損を振り返りながらも祇園祭を支える町衆の意気込みを代々伝えていきたいと締めくくりました。

その後は各委員会から今後の活動スケジュールが発表され、今年度の活動が始まりました。

教会庭の草引き ～壮年健幸行で有志が行なう～

京都教会壮年部は健幸行の4月26日、午前8時から有志が集まって教会庭の草引きを行ないました。専用工具を使用し、苔や草の区別をしながら綺麗な庭を維持出来るように手入れをしました。庭にはタケノコも生えており、壮年部員はびっくりした様子でした。これからますます温かくなり、何度か草引きを行なう予定です。

